国際プロダンサー転職支援組織（IOTPD）年次総会参加報告

尾崎瑠衣（バレエジャーナリスト）

「国際プロダンサー転職支援組織（IOTPD）」年次会合参加報告

調査の目的

1.　IOTPDについて

1.1　IOTPDの概要

1.2　メンバー、加盟団体

1.3　IOTPD創設者について

1.4　今日までの活動

2.　「プロダンサーの転職支援シンポジウム」報告（2015年5月30日 ソウル）

2.1　韓国ダンサーキャリア発展センター所長イン・ジャ・パク氏による挨拶

2.2　IOTPD理事長ポール・ブロンクハースト氏による基調講演

2.3　ダンサー転職の成功例

3.　IOTPD年次総会の報告（2015年6月1日 ソウル）

4.　日本への提案

調査の目的

ダンサーは2度死ぬ。最初は踊りを辞めた時に。そして1番目の死のほうが2番目より辛い。
（A dancer dies twice—once when they stop dancing, and this first death is the more painful.）

マーサ・グラハム

マーサ・グラハムのこの言葉の通り、ダンサーとしての職業に就く限り、その職業的な死、すなわちダンサーとして舞台からの引退は避けられない問題である。ダンサーという職業は永遠に続くものではなく、特にバレエダンサーは驚くほど若い30代～40代前半でプロとして引退することが殆どだ。不意の怪我などにより、それよりも若い年齢で引退を余儀なくさせられることも頻繁にある。引退の時期が早いがゆえに、その後のキャリアをどうするかという問題は、日本に限らず、世界中のどの国でも関係者の悩みの種であった。引退後はダンサーとしての経験を生かしバレエやダンスの指導者となるのが一般的な道筋であるが、しかし国家資格を取得しなければダンス教師にはなれない国もあり、準備なしにすぐに教師になれるというわけではない。ダンサーが全員、教師となることを望むわけではなく、また全員が教師としての資質に恵まれているわけでもない。振付家としての道もあるだろうが、やはりこれも全員が資質や活躍の場に恵まれるわけでもないだろう。また指導者や振付家などダンス関連の職業ではなく、まったく別の職業の資質に恵まれているという可能性もある。

国際プロダンサー転職支援組織（以降、IOTPD）は、プロダンサーの引退にあたって転職を支援する国際組織である。1993年にスイス・ローザンヌで設立されたIOTPDには現在8ヵ国8機関が所属し、各々の機関が各国で、キャリアの終わりを迎えたプロダンサーの転職を支援している。日本にはそのような趣旨の機関は存在せず、よって日本は加盟していない。

本調査の目的は、IOTPDやその加盟組織の活動に関する情報を調査し、同時に2015年5月終わりから6月初めに渡って韓国・ソウルで開催されたIOTPDの国際シンポジウムと年次総会の内容を報告することである。本調査ではウェブサイトに公開されているもの、されていないものも含め、できる限りの情報を収集し、そのまま掲載するように努めた。日本ではダンス関係者もIOTPDや関係機関の存在について認識していない場合が殆どである。まずこういった活動に関して情報を集め、日本語で紹介・提供することに意味があることだと考えた。

本調査によって、日本におけるダンス関係者が、ダンサーの転職に関し何ができるのかという議論を始めるきっかけとなることを願っている。

1．IOTPDについて

1.1　IOTPDの概要

IOTPDは1993年、プロダンサーの転職を支援する目的でスイスのローザンヌに設立された国際的なアンブレラ・オーガニゼーション（さまざまな機関や組織が集合した連合組織）である。ダンサーは身体を使い表現をする職業である。加齢に伴う身体の衰えや予期せぬ怪我などによって、比較的若いうちに舞台におけるプロのダンサー活動から引退し、転職を余儀なくされる場合が殆どである。なかでもバレエダンサーの引退は早く、30代に入ると引退を考え始めるケースが多い。IOTPDはダンサーとしてのキャリアを終え、新しいキャリアを開始する必要のあるプロダンサーのための転職アドバイスや経済的援助などを行う各国組織の連合体である。

IOTPDは世界8ヵ国に加盟団体があり、それらの連携を促している。

1.2　メンバー、加盟団体

IOTPDは公式ウェブサイトにおいて構成団体を以下のように定義している。

- ダンサーの転職支援制度、プログラム
- ダンス・カンパニー、バレエ団など
- 転職のための訓練機関
- ダンサーの労働組合
- その他、利益を一にする組織（例えば大学の研究者や政府組織など）

現在の構成メンバーは以下の8ヵ国に拠点を置く8機関である。

- カナダ：ダンサー転職支援センター（Dancer Transition Resource Centre）
- フランス：国立ダンスセンター（Centre National de la Danse）
- ドイツ：ドイツダンサー転職支援センター（Stiftung TANZ – Transition Center Germany）
- 韓国：ダンサーキャリア発展センター（Dancers' Career Development Center Korea, DCDC Korea）

- オランダ：ダンサー再訓練プログラム（Omscholing Dansers Nederland-retraining program for dancers）
- スイス：ダンサー転職支援機構（Association pour la Reconversion des Danseurs Professionnels -RDP）
- 英国：ダンサーキャリア発展センター（Dancer’s Career Development）
- 米国：ダンサー転職センター（Career Transition For Dancers）

現在のIOTPDの理事長はポール・ブロンクホースト氏（Paul Bronkhorst）である。彼はオランダのダンサー再訓練プログラムの所長も兼任している。

1.3　組織の目的と活動内容

IOTPDはすべてのプロダンサーが引退後、新たな職業への転職に成功できるよう、必要な支援を提供することを活動目的としている。

IOTPDの活動内容は主に以下の5つである。

- 国際的にダンサーの転職の必要性や重要性を訴え、関心を高めること。
- ダンサーコミュニティの内外と協力し、転職における困難を解決するような方法を探り、発展させること。
- ダンサー転職プログラムの設立を計画している団体、組織、国々を支援し、助言を行うこと。
- 転職活動を自ら行おうと努力するダンサーに力添えをすること。
- ユネスコや欧州連合（EU）等の国際機関に、ダンサーの転職問題を代表して訴えること。

1.4　IOTPD創設者について

IOTPDは1993年にスイス・ローザンヌで、フィリップ・ブラウンシュヴァイグによって創設された。

フィリップ・ブラウンシュヴァイグは1928年スイスに生まれ、チューリヒで物理学を専攻した。父からポルテスキャップ社（現在は小型モーターの会社として有名）を継ぎ、1986年に売却するまで同社を率いた。同時にパリでダンサーとしての訓練を受け、ダンサーのエル

ビール・クレミスと結婚。この結婚により、ブラウンシュヴァイグは生涯ダンスへの関心を持ち続けたと言われている[1]。2010年にスイスで死去。

ブラウンシュヴァイグはプロのダンサーではなかったが、ダンス界に非常に大きな影響を与えた。第一に1973年若手ダンサーの登竜門であるローザンヌ国際バレエコンクールを、ロゼラ・ハイタワー等と共に設立、第二に1993年ローザンヌを拠点としてIOTPDを設立したことである。ローザンヌ国際バレエコンクールを設立することでプロとしての第一歩を踏み出す若いダンサーを支援した彼は、同時にIOTPDを設立することで、プロのダンサーとしてのキャリアの終わりと次なる新たな第一歩を支援したいと考えたためだ。第三には、モーリス・ベジャール・バレエ団がローザンヌへ本拠地を移した際に、大きく貢献したことである。

IOTPDは2010年のブラウンシュヴァイグ死去後、氏を記念してブラウンシュヴァイグ基金を設け、ダンサーを支援している。ブラウンシュヴァイグ基金は、IOTPD加盟団体が存在しない国で活動する、転職を考えるプロダンサーを支援する基金である。

1.5 IOTPDの今日までの活動

IOTPDは現在までに国際シンポジウムを4回開催している。1995年5月にローザンヌで第1回目となる国際シンポジウムを開催、テーマは『ダンサーの転職～限界に向き合う。その現実と解決策』というものだった。参加者は約150名であった。1998年2月には、オランダ・ハーグで第2回を開催、テーマは『21世紀のダンサー、移り変わる世界における転職のための訓練とは』、参加者は約200名であった。2004年12月の第3回はモナコで開催された。テーマは『プロダンサーの転職～国際的な新たな発見、新たな視点』というものだった。第4回は2015年5月、韓国・ソウルで開催され、テーマは『プロのダンサー、新しい未来をデザインする』であった。このシンポジウムには約150名が参加したとされている。このソウルでのシンポジウムについては第2章で改めて詳しく説明する。2016年11月にもカナダで国際シンポジウムが開催される予定とのことである。

IOTPDでは、各団体の現状を報告し、IOTPDの将来を決定する場として、年次総会を開催している。2013年の年次総会はポーランド・ワルシャワで開催され、現在の構成団体から韓国を除いた7団体に加え、ポーランド国立バレエ団等が参加した。2014年にはオランダ・ハーグで開催され、現在IOTPDに加盟している8団体に加え、ベルギーのロイヤル・フランダース・バレエ団のメンバー、またスペインのDANZA-T（スペインにおけるダンス・カンパニーのアンブレラ・オーガニゼーション）のメンバーが参加した。2015年には韓国・ソウルで開催され、現在加盟している8つの団体に加え、ベルギーのロイヤル・フランダース・バレエ団

1　スイス公共放送協会国際部ウェブサイトhttp://www.swissinfo.ch/jpn/

のメンバー、また中国、香港、日本からの参加があった。この2015年の年次総会については第3章で改めて詳しく説明する。2016年11月にも、カナダで年次総会が開催される予定である。

【これまでIOPTDが開催した国際シンポジウム及び国際会議】

	開催年月	開催地	テーマ	参加者数
第1回	1995年5月	ローザンヌ（スイス）	『ダンサーの転職～限界に向き合う。その現実と解決策』	150人
第2回	1998年2月	ハーグ（オランダ）	『21世紀のダンサー、移り変わる世界における転職のための訓練とは』	約200人
第3回	2004年12月	モナコ	『プロダンサーの転職～国際的な新たな発見、新たな視点』	——
第4回	2015年5月	ソウル（韓国）	『プロのダンサー、新しい未来をデザインする』	約150人

2．2015年IOTPD国際シンポジウム
（2015年5月30日 韓国・ソウル）

IOTPDの2015年国際シンポジウムが5月30日（土）、韓国・ソウルのソウルサイバー大学で開催された。参加者は約150名、シンポジウムのタイトルは『プロのダンサー、新しい未来をデザインする』であった。シンポジウムは韓国政府文化体育観光部長官・金鍾徳氏と韓国アーツカウンシルによって支援された。シンポジウムの目的は韓国国内や世界各国のダンサー転職問題に対しての関心を高めること、またこの問題に関して、韓国に国際的な視点をもたらすこと、とされている。

2.1 韓国ダンサーキャリア発展センター（DCDC）所長 イン・ジャ・パク氏による挨拶

関係者によると、5月30日に開催されたIOTPD国際シンポジウム、続く5月31日から6月2日まで開催されたIOTPDの年次総会の中心となったのは、韓国ダンサーキャリア発展センター所長、イン・ジャ・パク氏（In-Ja Park）氏であった。政治力のある、非常に影響力が大きい人物であるという。

氏は映画に出てくるセリフ「まだ若くて自分の限界を知らない時は、何か途方もなく難しいことに挑戦しなさい」を引用し、本シンポジウムの根底に流れる精神とはこの言葉ではないかと述べた。また韓国政府の支援なくしては韓国ダンサーキャリア発展センターの設立も国際シンポジウムの開催もなかった、と政府への謝辞を述べた。

2.2 IOTPD理事長ポール・ブロンクハースト氏による 基調講演

この基調講演はIOTPDの基本的精神を非常によく表すものであるので、講演内容の大部分を紹介する。

ダンサーは情熱を持って職業にあたっている。職業というより天職と言ったほうが適切である。ダンサーはこの職業に自身のかなりの部分を捧げている。一般的な働き方は9時から17時まで勤務という場合が多いが、ダンサーは1日24時間、1週間7日をほぼ仕事に捧げている。ダンサーであることで、ある種のライフスタイルを要求され、『自分が何者であるか』と『自分が仕事としていること』に殆ど境界がない。

ダンサーは非常に若くして仕事を始める。特にバレエダンサーは、早く訓練を始める必要がある。あまりにも動くのが好きな子供だったため、親にバレエを始めるように勧められることもあれば、自分から踊りたいと思って始める場合もある。

子供の頃から踊りたかったとダンサーは言うが、私が『いつダンスを仕事にしようと思ったのか』と尋ねると、多くのダンサーは答えることができない。（中略）ダンサーはあまりにもダンス技術の習得に心を配るあまり、他のキャリアの選択肢が存在することに注意を払わない。『一生に一度のチャンスだ、これを逃したらもうチャンスはない』と他のダンサーなどに言われ、プロのダンサーとしての道を歩み始める。だから私の知る殆どのダンサーは『自らダンサーという仕事を選んだ』という自覚がなく、どちらかと言うと、いつの間にかプロのダンサーになっていた、ということが多い。（中略）

苛酷な要求をされる職業であるため、それが長きに渡って続かないということがこの職業の

影の部分と言える。いずれダンサーは自身の舞台での活動に終止符を打ち、新しい職業に就くことを要求される。それも他の職業ではまさに波に乗ってきたと思われるような年齢でである。

ではダンサーの転職には一体何が必要とされているのだろうか？　ダンサーが踊ることを辞めた時、彼らの人生は天地がひっくり返るような衝撃を味わうこととなる。日々の生活は劇的に変化する。ダンサーとしてのキャリアが終わるその日まで当たり前だと思っていたことが、当たり前ではなくなる。日課もまったく異なるものとなるこの時期が、ダンサーにとって困難な日々であることは言葉にされることがない。

ダンサーとしての仕事は非常に苛酷ではあるが、実はそれを通して彼らは重要なスキルや経験を身につけているということを殆どのダンサーは自覚していない。仕事への献身的な姿勢、自制心、豊富なスタミナ、そして完璧主義者であり、他の仲間とどう働くかを知っており、野心的で、人並み以上の責任感があり、結果主義者で、ストレスに強く、知的である。ダンサーとしてキャリアが終わりに近づくと、ダンサーの自信は損なわれる。よく私が聞くのは『私は踊れるけれど、社会にとってそれはどんな意味があるの？』という悩みである。ダンサーの大部分は前述のようなスキルを身につけたという自覚はなく、それが将来の自分の職業にどれだけ役に立つか、ということを意識していない。

もし適切な支援がなければ、前述のスキルや経験は、ダンサーとしての舞台でのキャリアが終わりに近づくとともに、無為に失われてしまう危機にある。

労働市場での足場を築くために、ダンサーは別のスキルや能力を新たに身につける必要がある。テクニックと芸術性の両方において高い水準を求められるこの職業により、ダンサーの得た経験というのは非常に特殊で限られたものとなる。特にダンス界以外に転職をするのは、新たに訓練を受けたり、再び教育を受けたりすることなしには非常に困難である。

新たな教育機会をダンサーに与えるのは、もちろん社会にとって負担になるだろう。しかし、もしこういった転職支援をしなければ、人材を無駄にするという意味で、社会的な損失を与えることになるのだ。

ダンサーに転職支援を行うというのは、非常にお金がかかることのように思えるかもしれない。しかし現行の転職支援プログラムの成功率は、こういった支援が最後には価値あることだと証明している。

（中略）

もしダンサーが新たな方向性を見つけることができたなら、彼らはダンサーとして成功するのに費やした情熱と同じ熱量を持って、新しい物事にあたるだろう。

転職支援センターの役割は、転職のそれぞれの過程でダンサーが新しい方向を見つけられるように支援することだ。ダンサーは自分の職業に強いアイデンティティを保っているところがあり、だからこそすべてのダンサーは、そういったダンサーの特殊な性格を理解している転職カウンセラーと話す権利を持つべきなのだ。それは転職の成功に不可欠な条件である。ダンサーの転職支援団体は独立し、自信を持って仕事にあたるべきである。

近年、ダンサーは国際的に活躍の場を求めて移動しているために、転職支援プログラムもそれに応じて作られ、また新しいプログラムを財政的に支援するような、国際的な枠組み作りが

重要である。

現在の世界経済の動向は、やっと元に戻り始めたとはいえ、様々な国の文化政策に避けがたい影響を与えている。（職業による）雇用機会や待遇にはばらつきがあり、ダンサーの需要に合わせた再就職支援プログラムを組み立てるのは新たな課題となっている。いくつかの転職支援センターでは、組織存続のために現存の支援プログラムの見直しを行っている。

転職支援は非常に専門的かつ官僚的で、効率優先の分野だと思われるかもしれない。しかし本質的には、人間の尊厳にも関わる問題であり、人生の意味の追及であり、また充足感の問題である。選択の自由でもある。結果的には個人と社会を豊かにすることであるのだ。

2.3　ダンサー転職の成功例

続いて元ダンサーが登壇し、IOTPD加盟団体の支援を得て、いかに自分がダンサーからの転職に成功したかについて話した。ケーススタディとして興味深いため、以下に詳細を報告する。話者は計4名である。本稿では初めに登壇者の名前とプロフィールを紹介し、その後に講演の内容を記す。

ピエール＝マリ・ケレ氏

（フランスの国立ダンスセンターの支援を受け、バレエダンサーからイベントマネージャーへの転職に成功）

リヨン国立高等音楽院を卒業し、リヨン国立バレエ団やモナコ公国モンテカルロ・バレエ団でプロのダンサーとして踊った。その後、フランスの国立ダンスセンターからの支援を受けてマルセイユのビジネススクールを卒業。国際企業LSOのイベントマネージャーとして働く。2009年にはカンヌ・ロゼラ・ハイタワー・バレエ学校の事務部長となり、2012年からはマルセイユ国立高等音楽院の事務局長を務めている。

『ダンサーはいつまでもダンサー』

私はリヨン国立バレエ団で振付家マギー・マランと仕事をし、モンテカルロ・バレエ団では1985年のバレエ団設立30周年公演に出演することができた。ダンサーとしてはとても充実したキャリアを築いてきた。バランシン振付『放蕩息子』やローラン・プティ作品を踊ったのもとても良い思い出だ。

しかし同時に、いつも「ダンサーは永遠に続く職業ではない。その後はどうしたら良いのだろう」という疑問を抱えていた。

転職の契機となったのは、子どもが生まれて父親となったことだ。家族に対する責任が生ま

れた。同時にダンサーとして引退を考えるような年齢も近づいて来ていた。正直に言って、転職は簡単ではなかったが、その必要に迫られたのだ。時間、お金、エネルギーなど、転職にはたくさんのものを注ぎ込まなければならないと痛感した。

まず初めに自分の持っていたネットワークを総動員して、会議運営会社の運搬係の仕事に就いた。車で物資を運ぶ仕事だ。真面目にこの仕事をした結果、会議運営アシスタントとなり、その後にイベント運営部門のイベントマネージャーとなった。イベントアシスタントからイベントマネージャーになるのに7年間かかった。必要なのは、必要とされる仕事に加えて、他の人にはできないような何か、例えば専門的な知識や、芸術的な質を付け加えるようなことだ。

イベントを運営するプロデューサーになってからは、ダンサーの時に自然に身につけた、舞台美術の知識がとても役に立った。ファッションショーをプロデュースした時には、舞台照明の知識を活かすことができたし、他にもメディアの使い方、何をどのようによく見せたら良いのかということでも、自分のダンサーとしての経験が活かせた。

ダンサーの転職が上手くいく条件を考えてみた。

第一にダンサーとして充実したキャリアがあること。まずプロのダンサーであるだけで、いかに幸せであるかを考えるべきだ。私自身はダンサーとして本当に充実した時間を過ごしていたので、キャリアを終える時に後悔はなかった。

第二にダンス以外で、しっかりした自分の時間、自分の世界を持つこと。ダンス以外の人間関係はとても重要だ。

第三に、ダンスは最高の人生の学校だ。ダンスを通じて自分が身につけたことを誇りに思うべきだ。

最後に、ダンサーの弱点を知っておくべきだ。初めて会議運営会社で働き始めた時は、正直言って本当に大変だった。ダンスの世界で他の人にアピールできた点は、一般社会では通用しない。一般社会はダンスの世界とかなり違う。例えばダンサーは、身体的な要素なしには、他の人とどうやって人間関係を築いたら良いか分からないものだ。

ではダンサーとはどのような性質の持ち主なのだろうか。ダンサーは芸術家で、浮世離れしていて、付き合い易いわけではない。しかし創造性に富み、根性、自制心もあり、物事に熱心で、仲間と働くことを知っており、時間には正確である。

イベントマネージャーとして働いたのち、私のキャリアに二度目の変化が訪れた。ロゼラ・ハイタワー・バレエ学校の事務部長として働き始めたのだ。今はマルセイユ国立高等音楽院の事務局長を務めている。

ダンスを学ぶ若い学生を見ていると、今も昔もダンサーの性質はそう変わらないと感じる。そして最後につけ加えたい。

次のキャリアとして君たちが何をしようが、ダンサーはいつまでもダンサーでいられるのです。

（ピエール＝マリ・ケレ氏談）

ソン・ハイ・フア氏

（スイスのダンサー再訓練プログラムの支援を受け、コンテンポラリーダンスのダンサーから鍼灸師への転職に成功）

韓国・釜山に生まれ、慶星大学校ダンス科を卒業。コンテンポラリーダンスのプロダンサーとして、ヨーロッパを本拠地として活動。様々な振付家のもとで踊る。スイスのダンサー再訓練プログラムの支援を得て、ジュネーブの鍼灸師、スウェーデン式マッサージ師（HP Formation）資格取得。現在は同資格を活かし、キャビネット中国式診療所にて勤務。

『再び夢みよう』

フランスとスイスを活動の拠点として20年以上舞台芸術の世界で創造的な活動を行ってきた。2006年に結婚し、6歳の娘がいる。ダンスは自分の隠れたエネルギーを表現する手段であり、一言でいうと、ダンスは自分のすべてだった。

不意の故障に悩まされるまで、私は一生ダンサーでいるものだと思っていた。2007年、36歳のときにひどい椎間板ヘルニアになり、思うように動けなくなった。それまでは情熱と喜びを持って踊っていたが、義務感で無理矢理自分を舞台に押し上げるようになってしまった。私にとってダンスはコミュニケーションの手段だったので、それを失うのは不安だった。しかし不安や恐怖と数ヵ月間戦った末、新しい道を見つけなければならないという結論に達した。正直なところ、人生のすべてをダンスに捧げてきたので、新しい道を見つけるのは本当に大変だった。身体で表現をするのが得意だったのだから、新しい職業も何か身体的な要素を必要とするものが良いだろうと考えていた。

スイス・ローザンヌでダンサー再訓練プログラムと出会い、新しい情熱を見つけることができた。そこに行って初めて、本当に数多くのダンサーが同じ悩みを抱えていることを知った。同時に様々なコミュニティに顔を出し、社会活動に積極的に参加する他の元ダンサーたちと知り合うことで、自分でも何か新しいことを始め、自信をつけたいと思うようになった。再訓練プログラムではいろいろと質問をし、有益なアドバイスをもらった。

初めは別の職業が念頭にあったのだが、鍼灸師の訓練プログラムを受けたらどうかとのアドバイスを受け、考えが変わった。2ヵ月間のプログラムを受講するチャンスをもらい、そこで初めて新しい道を見つけたのだ。本当に嬉しくて、情熱が再び戻って来たと感じた。

そのまま熱心に鍼灸師の勉強をし、現在の職業に就くことができた。

私はダンサーとして積み重ねてきた経験によって新しい鍼灸師としての道でも自信を持ってやって行けるようになった。ダンサーとして私は自分の内の世界を細部へのこだわりを持って表現し、かつ誰かに触れることをコミュニケーションの手段として用い、そして精密さが要求される反復運動を絶えず行ってきた。こういった経験を通じて、ごく自然に、他者の身体を理解する方法を身につけた。コミュニケーションという点で、ダンサーと（マッサージ）セラピストは共通する部分があるように思う。人間は動きを通じて他者とコミュニケーションを図り、他者に触れることで感情を表現し、自分の内と外との調和を図りながらいきいきと生活を続け

ていくのだ。

私は医師や病院から紹介されて私の元へやって来た人々の助けになりたいと心から望んでいる。ダンサーとして培った経験をもって、他者の身体的、精神的、そして感情的エネルギーを取り戻す手助けをするのは、自分にとって本当に意味のあることだと思うからだ。治療中はできる限りの注意を払い、集中力をもって、誠実に仕事に臨んでいる。プライドや権威から解き放たれ、クライアントの言葉に誠実に耳を傾けて治療にあたるように毎日努めている。また他者へ心を開いて人間関係を築き、信頼を得ることができるよう勉強を続けている。

（ソン・ハイ・フア氏談）

リャーン・ベンジャミン氏

（英国のダンサーキャリア発展センターの支援を得て、バレエダンサーからインテリアデザイナーへ転職）

オーストラリアに生まれる。16歳で英国のロイヤル・バレエ学校アッパースクールに入学し、卒業後ベルリン国立バレエ団に入団。1992年英国ロイヤル・バレエ団に入団。1993年プリンシパルに昇進。20年に渡りプリンシパルを務め、2013年7月に引退。引退後は英国のダンサーキャリア発展センターの支援を得て、チェルシー・カレッジ・オブ・アート・アンド・デザイン（チェルシー美術学校）のインテリア・デザイン科を卒業。インテリアデザイナーとして働く。

2年前にダンサーを引退した。17歳でジョナサン・コープと『ジゼル』を踊り、いくつかのバレエ団を経て、ベルリン国立バレエ団へ入団、そこで振付家のケネス・マクミランと出会った。私をロイヤル・バレエ団に入れてくれたのはマクミランだ。当時はダーシー・バッセルなど綺羅星のようなスターがおり、バレエ団は特に私を必要としていなかった。しかし彼は、「リャーンはバレエ団に必要な人材だ」と周囲を説得してくれたのだ。

自分としては踊りきったと思うし、ダンサーとしての時間を充分に過ごしたと思っている。もうジュリエットを踊りたいとは思わない。だからダンサーとして転職を考えるには、良い頃合いだったのかもしれない。

インテリア・デザインを思いついたのは、両親の影響だろう。私の両親はよく家でペンキを塗ったりしていた。同時にダンサーとして舞台美術に触れる時間が長かったこともあるだろう。毎日ドレスルームに辿り着くまでに、舞台装置の中を抜けていかなければならなかったのだ。

私はタマラ・ロホとドレスルームを共有していた。彼女は芸術監督になりたいと心に決めていたし、私はインテリア・デザインに心惹かれていた。さよなら公演が終わったあと、ただ何もしないで座っているのは嫌だと思った。すぐに何かを始めたかった。だからさよなら公演の準備期間中に、こっそりと勉強を開始していた。

ダンサーとして自己管理ができたということはとても役に立った。ダンサーは時間にも正確だ。大学では自分ひとりで勉強しなければならず、その点は大変だった。部屋にひとりで座っ

ているのも苦痛だった。他の学生はコンピューター上で設計をしていたが、私は模型を作ったりもした。

転職は思ったよりも簡単だった。初めは自分が誰なのかということ、すなわち自分のアイデンティティを変えなければならないようで、恐怖に駆られたものだった。もちろん金銭面での支援はありがたかったし、ダンサーキャリア発展センターの支えは心強かった。センターへ行けば、誰かに相談することができるからだ。私は4歳から踊ってきたのに、それを辞めなければならないのだ。センターに行って抱えている不安を話せることは、大きな心の支えになった。

現在はインテリア・デザインから1年ほど距離を置き、踊りの指導をしている。経済的な理由からだ。今まで長い間踊ってきたので、たくさんの知識や経験はある。私の知識や経験が私をどこへ導くのかはわからない。しかし確かなのは、ダンサーキャリア発展センターとIOTPDのおかげで、啓発され、新しい視野を手に入れたことだ。

（リャーン・ベンジャミン氏談）

ポール・ワーツ氏

（オランダのダンサー再訓練プログラムの支援を得て、コンテンポラリーダンスのダンサーから弁護士へ転職）

アーネム・ダンス・アカデミーを卒業。オランダを本拠地とする数々のコンテンポラリーダンスのカンパニーで踊る。オランダのダンサー再訓練プログラムの支援を得て、アムステルダム自由大学法学部を卒業。オランダを本拠地とする法律事務所Boekel de Nerée、Cleerdin and Hamerに勤務。2011年からオランダ中部裁判所において刑事裁判の判事を務める。また文化に関連する分野での理事や相談役など多数の経歴を持つ。

『獣医になるための様々な道』

4歳の頃から僕は獣医になりたかった。しかし今日僕はこのシンポジウムに、ダンサーからいかに判事になったのかについて話すために呼ばれている。皆さんは、「あなたは獣医になりたかったのにどこで道を間違ったの」と思われるかもしれない。

17歳の時に初めてバレエのレッスンを受けるまで、ダンスには何の関心も持ったことがなかった。インドネシアのダンスグループで、家族と一緒に何年も公演活動を続けていた友達が「ちょっとバレエのレッスンを一緒に受けてみないか」と僕に声をかけてきたので、受けてみることにした。振り返ってみると、この決断はその後の人生に大きな影響を与えることになった。

それはちょっと不思議な光景だった。2人のバレエ経験のないティーンエイジャーの少年が、小さな白いチュチュを着た女の子に囲まれて、レッスンを受けているのだから。当時、バレエレッスンに男の子がいることは珍しく、もしいたとしてももっと小さな男の子だった。僕はそこで人生で初めてのタンデュやプリエをした。同時にバレエが自分の人生を変えるだろうということに気付いたのだ。今日になっても、どうしてあれほど踊りに魅了されたのか上手く説明

ができない。とにかく僕は魅了され、週に何度もレッスンを受けるようになった。その2ヵ月後に僕の友達がアーネム・ダンス・アカデミーのオーディションを受けると宣言し、僕も一緒に受けることにした。そして2人とも合格した。当時の僕にとって、それは実に大変な冒険だった。新しい世界の発見だった。だがその時点でも、僕はまだ獣医になりたいと思っていた。

アカデミーでの1年目で、ダンスを踊ることを趣味としてではなく、将来の生きる道として意識し始めた。自分のまわりの全てが「ダンス」だった。初めはジョークのつもりだったが、ダンスについてもっと真剣に考え、ダンサーを職業として意識するようになった。

初めて観たダンス公演は、クリスティーナ・デ・シャテル・ダンス・カンパニーによるミニマルダンスの公演で、それにすっかり魅了されてしまった。その日からカンパニーの行動を追い、殆どの公演を観て、自分があのカンパニーと働くことができる道を探してみようと考え始めた。ダンス・アカデミーでの最終学年時に彼らに連絡を取り、見習いとしてカンパニーで働き始めた。そして1年後には正式に契約をした。それが将来に渡るカンパニーとの関係の始まりになった。

ダンス・カンパニーと共に、そして振付家と共に、僕はプロとしてのダンサーの道を歩み始め、このカンパニーに何年にも渡って在籍した。他の可能性にも挑戦してみたかったので、2度ほど別のカンパニーに移籍もしたが、やはりクリスティーナ・デ・シャテル・ダンス・カンパニーに戻って来た。単純に彼女の作品がいちばん好きだと気付いたからだ。10年に渡りオランダの殆どすべての劇場で踊り、海外公演にも何度か行った。僕は毎日を心から楽しんでいた。

プロのダンサーとなったその日から、これが永遠に続くことがないことは分かっていた。もちろんダンサーとなった当初から別の職業に就きたいと思っていたわけではない。なぜなら自分はステップや振付を習得する以外のことを習ってこなかったし、それ以外に何もできないと思っていたからだ。

ダンサーとしてのキャリアに終焉は避けられないと気付くには、しばらく時間がかかった。しかし、別の選択肢を考えなければならないと理解し始めてからは、適切な時期を逃さないように、別の職業に就くことの必要性を考えることに集中した。しかし、何から始めたら良いのかがわからなかった。踊ることは自分にたくさんのものを与えてくれたし、ダンス漬けの日々だったが、ダンサー以外の仕事は自分に同じような充足感を与えないことも理解していた。僕は教えることにも振付にも興味がなかったのだ。

ダンスを辞めることだけではなく、それまで自分の人生を送っていた安全な環境から離れなければならないことは、本当に恐ろしいことだった。友人の殆どはダンサーだったし、パートナーもダンスの世界で働いていた。僕の一日は仕事によって決まっていたし、しかも一日のスケジュールは別の人が決めていた。いつどこでリハーサルをするのか、どこで公演をするのか、何時にバスに乗らなければならないのかなど、言われた通りに行動していたが、突然全てを自分でしなければならなくなったのだ。けれど驚くことに、この新しい自由を得たことに僕はとてもわくわくした。自分で自分の予定を立て、そして自分で決断を下すことを楽しみ始めた。僕は次の段階に進む準備ができたのだった。

ダンスにおいては作品が情熱的であるがゆえに、ダンサーは情熱的に踊る。また情熱があるからこそ、疲れ果てていても、怪我をしていても、ダンサーは踊り続ける。情熱というものを上手く表現することができないが、自分の次の仕事にも、ダンスに費やしたのと同じレベルの情熱を感じられるものでなくてはならないと考えていた。その過程で情熱はアーティストだけのものではないということを発見した。どんな職業でも情熱を持って取り組んでいる人はいるのだ。

それに気付いたとき、ダンスを引退した後に何をするのかを決めるのは随分楽になった。どんな方向であっても、自分がわくわくする方向で、将来的にはダンスと同じような満足感を得られるような道に進めると思うと、新しい世界が自分の前に広がっているような気分になった。

僕はまた学問を、そして知的挑戦をしてみたいと思った。そこで人生の初めに考えていた夢をもう一度叶えようと思い始めた。

僕はまた獣医になりたいと考え始めたが、同時に別の選択肢もあるのではという思いも抱き始めた。プロのダンサーとなった当初から、僕は芸術家労働組合で積極的に活動していた。カンパニーにおいてもダンサーが望むことがある時には、ダンサーの代表として運営側と話をしていた。僕は自分が交渉や議論が好きで、そういった能力は別の仕事にも生かせると気付いたのだ。それでもどんな職業を選べばいいのかとなると、さっぱり分からなかった。多くの人と会って彼らの職業について尋ね、新聞の求人広告を丹念に読み、どんなことが自分の興味を引いて、何に興味がないのかを考えた。

そしてある日、その瞬間が訪れたのだ。法律だ！僕が弁護士として働いている姿は容易に想像できた。しかし弁護士の日々の生活がどんなものかは想像できなかったし、また僕に十分な才能があるかも分からなかった。しかしこの決意が正しいと強く信じることはできた。これは一生に一度のチャンスだ。でも新しいことを始めてみて、上手くいかなかったら？

僕はキャリアカウンセラーに相談し、アドバイスを得てこの決断を下すことにした。もちろん家族や友達とも何度も話した。ダンサーとして舞台に立つ傍ら法律学校に通い始め、もうダンサーを引退するのが待ちきれないような気分になっていた。僕にとってダンサーという安全だった世界を後にする準備が整ったのだ。

1997年の秋に僕はさよなら公演を行った。これが最後の舞台になると知っていた僕を知る全員がその公演を観に来ていて、非常に感動的だった。そして、その2週間後には大学の椅子に座って学生生活を始めていた。わくわくしていたが、同時に不安でいっぱいだったし、頭の中は疑問だらけだった。自分は年を取り過ぎていないか、どうやって生活したら良いのか、上手くできなかったら・・・、嫌になってしまったら・・・、この生活の後にはどんな人と出会うことになるのだろう、もし望んだら引退を取り消せるのだろうか、そういった数多くの疑問と不安だ。しかしほどなくして、僕は法学を愛し始め、また新しい生活を愛し始めた。いつどこで勉強するか、勉強しないか、そういったことに対しても僕には決定する自由があった。勉強が上手くいき、自分が優等生だと気付くと、自分の決断に対して自信を持ち始めた。時が経って振り返った時、自分が成し遂げたことに満足感を覚えた。もちろん、大部分のダンサーのように僕は自分の踊りに常に完全に満足することはなかった。しかし新しい生活を通じて、

僕はプロのダンサーとしての日々を通じて多くのことを学んだことに気付き、それは人生を通じて役に立つのだと気付いたのだ。自分を律することや、チームワーク、スタミナ、演じること、忍耐、ストレスや痛みや疲労と上手く付き合うこと、完璧主義、そういったことをダンサー生活を通じて学んだ。ダンサーにとってこういったことは日々行っていることだが、世の中の全員も当然そういった能力を持ち合わせていると思っていた。そんなことはないのだ！

僕はオランダのダンサー再訓練プログラムの支援を得て勉強をすることができた。勉強をしている期間、ダンサー再訓練プログラムは失業手当に加え、生活費の不足分も支払ってくれた。もちろん学費、書籍、勉強に必要な費用も払ってくれた。こういった支援があったおかげで経済面の心配をする必要もなく、4年間で大学を卒業することができた。年齢のこともあり、卒業後に仕事を見つけられるかいつも心配していたが、権威ある法律事務所で簡単に仕事を見つけることができた。

大学で勉強している間は行政法と犯罪法を専門としていたが、弁護士としてまた選択を迫られた。僕は犯罪法を選び、その結果として働き始めた法律事務所を離れ、また新しい職場を探さなければならなくなった。そして、規模は小さいが、専門性が高く、犯罪法の世界で非常に有名な法律事務所に入所した。

その法律事務所の設立者はまるで芸術家のような人だった。自分のしていることが好きで、クリエイティブで、情熱的で、犯罪法に一心に打ち込んでいた。彼と出会ったことで、幸せになるにはどの分野で働くかは問題でなく、自分の仕事を誠心誠意することが大切なのだと気付き、僕もそうするように努めた。新しい情熱を見つけ、もうダンスの世界を振り返ることはなくなった。もちろん、ダンスのことを少しは考えることもあったが、ダンスなしで生きていくのは驚くほど簡単だった。ダンサーはそんなことは悪夢だと思うかもしれないが、しかし僕だけではなくみんな、自分が思うよりも多くのスキルを知らずに身につけているのだ。どうやって自分がすでに身につけたことを認識するかの問題だと思う。

弁護士となって10年が経ち、仕事も軌道に乗った頃、僕はまた新しいキャリアの段階に踏み出す準備ができていた。ここでまた、僕は働き慣れた法律事務所を離れることになったが、これは僕がダンサーとして引退した時とは状況が違っていた。僕が判事としての仕事に応募したからというのが理由ではない。ダンサーから別の職業に転職する際に気付いたように、変化は単に恐ろしいことではなく、新鮮な気分で充実したものになることがあり得ると知っていたからだ。現在、犯罪法を専門とする判事として3年半ほど働いているが、僕はこの新しい職がとても好きで、新しい変化にとても満足している。

それでも僕は元ダンサーでもある。最後の公演は17年前にもなるが、今でもダンスは僕の生活の重要な一部だ。それも踊ることそのものでなく、踊ることを通じて身につけたことがだ。今の職業でも、僕はプロのダンサーとして身につけたスキルを毎日のように使っている。自分はボディランゲージにとても敏感だし、チームで働くのはどういうことかも知っている。こういったスキルは素晴らしい価値となるものだ。そしてもしかしたら、こういったスキルはいつか僕が獣医となった時にも使えるかもしれない！

皆さんの中には、ダンサーとして引退を考えている人がいるかもしれないし、僕がかつて抱

えていた疑問や不安に悩まされている人もいるかもしれない。僕のこの話が君たちを正しい方向へと導く助けとなることを願いたい。僕のアドバイスは、自分がどんな資質を持っているのか、何が得意なのか、そして何が自分を幸せにするのかを探ることだ。他の人が君に言ったことや、その時の労働市場の動向に振り回されないように。僕らをめぐる世界は常に変化している。すべての人の生活を激変させた産業革命があったが、僕らは今、それ以来の変革期と呼べるような技術革命の真っ只中にいる。10年後に世界がどうなっているか、僕らには想像もつかない。だからこそ将来、世界がどうなるかと他人が考えたことに、君の選択を委ねることは意味のないことだ。君が知っているのは、何が君を幸せにするかだ。大きく考えよう。ダンススタジオや舞台で過ごした何十年の経験よりも、世界はもっと広く、おもしろいものだ。

ダンスを学ぶ学生やプロのダンサーと関わり、その責任にある方々に伝えたいのは、あなたたちには現在のダンサーの状況に対してだけ責任があるのではなく、ダンサーのキャリアが終わった後に関しても責任があるということだ。キャリアの終わりには、ダンサーは全員、自分自身でこの後どうするかを決めなければならない。しかし彼らには支援が必要であるし、それに必要な準備もなされるべきだ。ダンサーとしてのキャリアの始まりを手助けしたのなら、その人たちはまたキャリアの終わりについても考えるようにすべきだ。避けられない引退をただ待つよりも、ひとりひとりがダンサーとしてのキャリアの途中で転職について何らかの手を打つ方が健全だと思う。これには、政策が関わる必要がある。政府が転職支援のためのプログラムを提供するべきで、それはすなわち資金の拠出が必要であることを意味する。学費は政府によって払われるべきだし、また生活費の支援や、カウンセラーなどによる支援もされるべきだろう。こういった制度が作られたならば、労働市場のどの分野にも、才能あふれる、勤勉で、仕事に打ち込む、（元ダンサーの）労働者が見られるのではないか。政府が支払った資金は簡単に戻ってくる計算だ。その労働者たちは他の人にも心を開き、感情的つながりを持ち、信頼を得るように専門分野での勉強を続けるだろう。

僕の話が、新しい生活を目前にして困難にぶつかった、数多くの人々の助けになることを願っている。

（ポール・ワーツ氏談）

3．IOTPD年次総会　（2015年6月1日　韓国・ソウル）

IOTPD年次総会は2015年6月1日、2日に韓国ソウルで開催された。参加したのは加盟8ヵ国8機関の代表が中心である。アメリカとカナダの代表はスカイプを通じての参加となった。加えて中国の舞踊批評家、香港バレエ団のアーティスティック・プランニング部門部長、ベルギーのロイヤル・フランダース・バレエ団メンバー兼労働組合幹部、日本からも参加者が会議の席についた。

総会は2日間に渡ったが、本調査は初日の6月1日のみに参加したため、初日に話題にあがった内容を、補足情報を含めて紹介する。6月1日は各機関の現状報告などであった。6月2日は各団体の決算や次年度の総会について、また本年度のフィリップ・ブラウンシュヴァイク賞受賞者の選定など、主に事務的な内容で行われたということである。

3.1　加盟団体の沿革と現状

本項では各団体の概要や沿革、また年次総会で所長から発言があった際には、その発言も紹介する。

英国：ダンサーキャリア発展センター（Dancer's Career Development）

ロンドンに本拠地を置く団体であり、IOTPD関連団体のなかで最も歴史が長く、40年以上に渡って活動を続けている。対象は英国全土のプロダンサーで、キャリアの終わりに直面したダンサーに向けて、専門家による転職カウンセリングに加えて、精神的、経済的支援などを提供している。もともとバレエ団が資金を出し合って設立された団体であるためか、組織のパトロンとして英国ロイヤル・バレエ団生みの親であるニネット・ド・ヴァロワや、バレリーナのベリル・グレイ、振付家・演出家のピーター・ライトらが名を連ねる。

沿革：

1973年に「ダンサー再出発基金（The Dancers' Resettlement Fund）」として、英国アーツ・カウンシルが支援する5つのダンス・カンパニー、主にバレエ団が資金を出し合うかたちで設

立された。設立の発起人は『オブザーバー』紙などに寄稿していたバレエ評論家ピーター・ウィリアムス（1995年死去）である。バレエ団の資金で始められた組織なので、当初、支援の対象はクラシックバレエのダンサーのみであった。しかし活動規模は順調に拡大し、1980年代（1986年か1987年と思われる）には支援の対象を全英のすべてのプロダンサーとすることになり、クラシックバレエのダンサーだけではなく、ウェストエンドのショービジネスで働くダンサーやコンテンポラリーのダンサーまで拡大された。活動の内容が変わったため、組織の名称を「ダンサー再出発基金」から「ダンサーキャリア発展センター」へ変更した。

所長談：

「最近は支援をもっとサポートプログラムの方へ拡大しようとしている。以前はダンサーの転職に向けて、金銭的支援をすることに焦点が当たっていた。8年間プロとして活動したダンサーで、その内の5年間が英国での活動であれば、転職基金に応募する資格を得ることができる。それは学費に使っても良いし、また転職に必要な機材などを購入する資金に充てても良いことになっている。例えばダンサーが転職後に写真家になりたければ、カメラなどの機材を購入することができる。

しかし、ここ数年は、資金援助よりも精神的な支援を行う転職支援プログラムへの需要の方が多くなっていることを感じる。2年前から私たちはダンサーへのコーチング[2]プログラムを始めた。現在、我々のコーチング部門を統括しているのは、マシュー・ボーンのニュー・アドベンチャーズで10年ほどダンサーとして活躍していた元プロのダンサーだった人だ。我々の団体に来てコーチングの技術を学び、転職を望むダンサーたちが、転職に関してどのように考えているのか、プロとして舞台で活躍した後はどのようなことがしたいのかを言葉にする手伝いをしている。一対一で行うこのコーチングに対する需要は驚くほど高い。

また昨年からダンサーへのワークショップも始めた。これはプロとしてのキャリアの様々な段階にいる人たちが集まり、転職について考える場だ。

その結果、我々の組織では金銭的な支援への申請数は減り、精神的、また心理的な支援への需要が増えている。需要数が多いので、私たちとしては今の状態を維持したいと思っている。」

補足情報：

最も設立が古いために、IOTPDのなかでも存在感のある組織である。所長のジェニファー・カリー氏は大学でダンスを学び、様々な芸術や文化関連組織で働いた後に、現在の地位にいるとのこと。

2 「コーチング」とは誰かになにかを指導するのではなく、本人から答えを導き出す助けをする技術のこと。

米国：ダンサー転職センター（Career Transition For Dancers）

ニューヨークのリンカーン・センターに本部を置く非営利団体。支部がシカゴとロサンゼルスにある。今までに全米47州で約4,600名のダンサーの転職を支援し、約46,000時間分の無料カウンセリングや転職セミナーを開催してきた[3]（2011年時点）。また転職を支援する資金援助のプログラムも各種行っている。個別の転職カウンセリングだけではなく、グループでのワークショップや通話料無料の電話相談も受け付けている。

沿革：

1982年にアメリカの劇場労働組合幹部が英国での国際会議に参加した際に英国にダンサーの転職機関があるということを知った。彼は「アメリカでも同様の機関が必要なのではないか」と考え、設立に向けて動き始めた。その結果、同年、当時アグネス・ド・ミルが率いていた俳優労働組合や全米芸術基金など様々な団体が一堂に会して、「ダンサー転職支援の機関が必要か」という内容で議論を行う会議の費用が政府から支払われることが認められた。

1982年6月8日、アグネス・ド・ミルを名誉理事として会議が開催された。この会議ではダンサーがキャリアの終わりに感じる精神的な落ち込みや、ダンサーの資質が社会においてどんな意味を持つかが話し合われ、ダンサーへの転職支援は必須だ、という結論に達した。1985年に全米俳優組合（Actor's Equity Association）、全米テレビラジオ芸術家組合（American Federation of Television and Radio Artists; AFTRA）、音楽関連芸術家同業組合（American Guild of Musical Artists : AGMA）、映画俳優組合（The Screen Actors Guild）が資金を提供して設立された。

カロライン・ニューハウス（2003年死去）という理解者、資金提供者にも恵まれ、ダンサー転職センターは大きく発展を遂げた。自身もアーティストであるカロライン・ニューハウスは、慈善家であり、ダンサーの活動やキャリアに理解があった。彼女は自身の創作活動のモデルとしてやって来たダンサーが「舞台で踊るためにどれだけ練習するのか」や「ダンスしか知らないのに、29歳になったら19歳に出来ていたことができなくなる」と言うのを聞き、ダンサーの人生への理解を深めたという。カロライン・ニューハウスは夫のテオドールとともに、100万$を転職センターへ寄付し、それは転職支援へと使われた。現在もニューハウスの名前を冠した転職の資金援助プログラムが行われている。

1995年にはロサンゼルスに、2008年にはシカゴに支部が設立された。

所長談：

「私は2001年にこの団体に入り、13年ほどになる。私は理事だが、会計業務も行い、所長でもある。最近理事長になった。私が参加してから、この団体の活動の対象をもっと広くしよ

3 "Career Transition For Dancers Presents Their National Outreach Project 9/11" Broadway World http://www.broadwayworld.com/cleveland/article/Career-Transition-For-Dancers-Presents-Their-National-Outreach-Project-911-20100819#

うとしてきた。もともと支援の対象は引退を考え始めたプロのダンサーだけであったが、ダンスを学ぶ学生やまだプロになっていないダンサー、見習いのダンサーなどに、ダンサーというキャリアが永遠に続かないということを伝える活動を行っている。キャリアの終盤になって、準備もなく不意に絶望に陥ることがないようにするためだ。1985年の設立時に比べ、現在20倍近くになった運営資金は、ダンサーへのカウンセリング、それに転職の際の奨学金や支援金として使われている。」

補足情報：

IOTPDの構成団体のなかでも英国、オランダと並んで存在感があり、最も規模が大きいと思われる。活動資金は企業からの献金が多い印象であった。ガラ公演を開催するなど、資金獲得のために精力的に活動をしているようだ。2015年には組織の設立30周年を迎え、大掛かりなガラ公演をニューヨーク・リンカーン・センターで行った。ロレックスが主な協賛企業であった。ウェストエンドのミュージカルなどを中心として活躍するダンサーに加え、ミスティ・コープランド（アメリカン・バレエ・シアター、プリンシパル）なども出演した。

カナダ：ダンサー転職支援センター（Dancer Transition Resource Centre）

本部がトロント、支部がバンクーバーとケベックにある。ケベック支部は、常時オープンしているわけではなく、時期と時間を限定してオープンするとのことである。過去25年間に1万人以上のダンサーの転職を支援した[4]。本組織の興味深い点は、引退の迫ったプロダンサーの転職だけでなく、ダンスを学ぶ学生がプロになる際の支援も行っていることだろう。組織目標は「ダンサーがダンス界に入る際に、ダンス界の中で別の職業に移動する際に、またダンス界から別の業界へ移る際に、必要な手助けを行うこと」となっている。

沿革：

ジョイサンヌ・シディマス（Joysanne Sidimus、カナダ国立バレエ団の元ダンサー。本団体の設立者で文筆活動も行う）がダンサーの引退後の生活について、本の執筆のために調査を始めた時には、北米にはダンサーの転職を支援するといった趣旨の団体もなければ、発想もなかった。しかし1983年までに、2冊の政府への調査報告書が書かれた。どちらもダンサーの転職支援の組織が必要だという内容であった。

カナダダンス連盟（The Dance In Canada Association）、カナダプロダンサー連盟組織（The Canadian Association of Professional Dance Organizations）が協力して調査を行ったあと、1985年3月20日に組織が発足し、9月1日に正式にオープンした。2005年の引退まで、設立者の

4　カナダ・ダンサー転職センターのウェブサイト　http://dtrc.ca/english_about/history

ジョイサンヌ・シディマスが所長を務め、元ダンサーで女優である現在の所長、アマンダ・ハンコックスが後を継いだ。

所長談：

「本団体が設立されたのはアメリカの場合と同じように、英国の影響を受けた結果である。カナダでアーツ・カウンシルが設立されたこととも関係がある。政府が全国規模で芸術関連の調査を行った際に、ダンサーの転職支援組織が必要だという声が上がったためだ。我々の組織はアメリカと同じ1985年に設立された。アメリカと異なるのは、プロダンサーの転職を支援し、それが予算の大部分を占めるが、それと同時にダンスを学ぶ学生がプロになる際の支援も行っていることだろう。そのためダンス学校やバレエ学校を卒業した学生がプロダンサーになれるようなプログラムも行っている。転職支援、プロになる支援に関して、カナダ全土でさまざまな会合を開いている。ダンス界の中でダンサーから別の職業に移ろうとしている人々の手助けもするが、同時にダンス界から全く別の業界に移ろうという人々の支援も行っている。」

フランス：国立ダンスセンター（Centre National de la Danse）

本部はパンタン（パリ北部）、支部がリヨンにある。転職支援だけではなく、ダンサーの訓練やダンス関連の情報センター機能、ダンスの歴史や伝統の保存、ダンス教師の育成、振付家育成、ダンススタジオの提供、教育のためのダンス関連映像の制作・保存、ダンス関連書籍の発行など、様々な役割を担っている組織である。現在、計93名の職員が勤務している。

沿革：

1991年にフランスにおけるダンサーやダンスに関する政府報告書が提出された。その中にはダンサーの転職に関するものも含まれていた。この報告書により、フランス政府文化省は、ダンスのみに特化した支援団体が必要だと判断した。その結果、1998年に国立ダンスセンターが設立された。近年になってパンタンに建設された国立ダンスセンターの建物は様々な機能を備えており、そのひとつであるダンススタジオは多数のカンパニーに使用されている。また映像を見られるような設備も備えられているとのことである。

談話：

「フランスではすべてが1ヵ所で行われている、という点で他の団体とは異なるのかもしれません。職業的訓練も転職もひと続きで考えられているからです。私たちは一対一でのカウンセリングやワークショップなど様々な活動を行っています。先程、『英国では最近、精神的支援への需要が高い』という発言がありましたが、私も同感です。ダンサーへの転職支援は単に金銭的なものであるべきではなく、転職カウンセリングなどの精神的な支援と一緒に考えられるべきなのだと思います。精神的支援の問題はフランスにおいても非常に大切です。」

韓国：ダンサーキャリア発展センター（Dancers' Career Development Center Korea, DCDC Korea）

韓国・ソウルに本拠地を置くダンサーの支援組織。ダンサーの権利を保護し、ダンサーの雇用機会創出、福祉、また労働環境改善のための団体である。ダンサーが転職する際には、経済的支援に加えて、コンサルティングなど精神的支援も行っている。ダンサーの怪我防止に向けた活動、怪我からのリハビリ支援、ダンサーとして問題に直面した際の相談場所等としても機能している。

沿革：

IOTPD加盟団体の中では新しい団体で、所長であるイン・ジャ・パク氏の尽力により2007年に設立された。設立にあたっては韓国政府、アーツカウンシルから資金援助を受けているとのことである。

補足情報：

2014年度には、韓国アーツカウンシルより10億Wを支援されたとのことである。

オランダ：ダンサー再訓練プログラム（Omscholing Dansers Nederland-retraining program for dancers）

1986年に設立された、オランダ・アムステルダムに本拠地を置く、IOTPDのなかでも歴史のある組織である。団体の趣旨はダンサーの再就職支援であり、キャリアの終わりを迎えたダンサーへ経済的、また精神的な転職支援を行っている。同時にダンサーの雇用における相談、例えば契約書締結における法律相談や社会福祉への申請の手伝いなども行っているとのことである。

沿革：

1979年にオランダのダンサーの置かれた状況を調査した報告書が書かれた。そこで、キャリアの終わりを迎えたダンサーに支援が必要だということが明らかとなった。報告書を受けた文化省は、ダンサー転職支援組織設立に必要な資金、100万ギルダー（約45万ユーロ（以降、€）に相当）の支払いを決定、その結果、1986年に組織が設立された。

その後、文化省からの要請により、「ダンサーのための追加基金」（The Funds for Additions for Dancers）が設立された。文化省は本団体設立のために資金を投じたが、団体維持の資金は、ダンサーやバレエ団から募るようにとの趣旨で設立されたものだ。これで団体が維持できるだろうとの目論見であった。

しかしダンサーやバレエ団からの資金では維持できなくなり、団体は再度、文化省に資金の

提供を依頼、2001年に、政府から毎年80万€の資金援助を受けられることとなった。資金はダンサーの転職のためのカウンセリングや資金援助に使われている。ひとりのダンサーが転職活動を始め、実際に職を得るまでに約7万5,000€が使われている。

所長談：

「長い間この組織に携わっているが、気を緩ませる瞬間というのはなかった。他の組織と同様に、この団体を維持し、活動を続けるのは簡単ではない。理解できることではあるが、バレエ団やダンス・カンパニーにとって、ダンサーの転職というのは最優先事項ではないからだ。現在、私たちは誰が転職支援を受けられるかという受給資格、支援内容を見直しているところだ。よってこれから2年以内に団体の運営内容は改善されると考えている。支援は持続可能なものでなくてならないし、これまで最も気を使ってきた問題だ。」

スイス：ダンサー転職支援機構（Association pour la Reconversion des Danseurs Professionnels -RDP）

スイス・ローザンヌを拠点として活動する非営利組織である。主にスイスのフランス語圏で活動するダンサーを対象としている。キャリアの終盤にいるプロダンサーの転職を支援する活動を行っているほか、ダンス学校を卒業したダンサーがプロとしてキャリアを始められるような支援も行っている。

沿革：

1993年にスザンヌ・ジャイエ氏によって設立された。IOTPD設立者でもあるフィリップ・ブラウンシュヴァイク氏も名誉理事として名を連ねている。

ドイツ：ドイツダンサー転職支援センター（Stiftung TANZ – Transition Center Germany）

ドイツ・ベルリンを本拠地として活動する団体である。本団体はダンス学校での職業訓練を行うところから、プロとしての活動を終え転職を果たすまで、すべての段階で支援を行っている。理事長はハンブルク・バレエ団芸術監督のジョン・ノイマイヤーである。団体のウェブサイトによると、ダンス関連の教育のための奨学金からダンサーへの失業手当まで、広く活動を行っているようである。

沿革：

2008年3月に、ダンサーへの転職支援の必要性、加えて転職支援団体の設立の必要性を訴え

た報告書が作成され、それを受けたドイツ連邦政府文化財団等の支援によりワークショップが開催された。その結果、本団体は2010年1月19日にベルリンを本部として設立された。

3.2 IOTPD加盟団体以外の参加国の談話

香港からの参加者

「話を聞いて、いくつか指摘したいことがある。

香港バレエ団はかなりの額の支援が政府からなされている。香港の基準では、それが非営利組織であるからだろう。私はアメリカでダンスの教育を受けているが、アメリカでは政府からの援助はわずかだったので、香港政府がバレエ団へ支援する金額には驚いている。

またこれはどこでも同じだが、こういった支援活動はバレエ団が始めることが多いものだ。クラッシックバレエがダンス界の良いところを取っていく印象がある。コンテンポラリーはいろいろな点でバレエの次、という扱いを受けることが多い。

香港でもこういったダンサーの転職支援を考える必要があるかもしれない。しかしそれも、どう運営していくかで問題がいくつもありそうだ。まずアジアではこういった問題に対して、政府の理解を得られるのか疑問だ。『自分で職業を選んだのだから、それが上手くいかなくても自分の責任だろう。どうして誰かが助けなければならないのか』と言われるのではないか。また同時に、香港バレエ団には中国本土から来ているダンサーが数多くいる。例えば給与の1%を後の転職のための基金に充てるような制度を作ったとしても、その1%は中国本土では大変な価値を持っており、家族に仕送りをしている彼らにとって、その1%は大きな意味を持つ。彼らはすでにダンス学校を設立する、ダンス関連のコスチュームの店を出す、など将来の計画を考えていることが多く、1%を将来のために積み立てるという発想はなかなか理解してもらえないかもしれない。

どのように人々に理解してもらうか、というのが一番の問題点になるだろう。」

ベルギーの代表者

「昨年もIOTPDに参加し、帰国後、様々な働きかけをした。その結果、自分のバレエ団では転職支援に対して周りの理解が得られつつある。ロイヤル・フランダース・バレエ団では人事の理解が得られ、バレエ団内ではあるが、転職支援プログラムを30歳以上のダンサーを対象に試験的に行うことになった。劇場内の別の部署、例えばメイクアップ、人事、舞台衣装などどこでも構わないが、そこで働いてみて自分の適性を試すことが出来るという内容だ。またオランダの転職支援プログラムからスタッフを招いて、カウンセリングを受けることができるという機会も設けた。」

中国からの参加者

「こういったダンサーへの転職支援団体は中国にも必要だと強く考える。世界にはこういった転職支援の動きがあることを中国のダンス関係者にも知らせ、この総会の様子や様々なIOTPDに関する情報を中国語に翻訳して、関係者に紹介したいと考えている。中国ではプロとしてキャリアを終えたダンサーは、生活をしていくためにあまり職業を選んでいない印象があり、それは彼らの持っているスキルや資質の無駄遣いであるといつも思っていた。正直、ダンサーは舞台でのキャリアが終わったら、もう将来のない状態だ。

中国では中国政府が中国芸術基金を設立したばかりだ。そこの支援で何かできないかと考えている。

私は芸術の理論的、学術的な面を扱う芸術大学で働いているが、同時に職業訓練校にも勤務している。ダンサーは身体的な技術に多くの注意を払うので、身体が衰えた後もずっとその理解が役に立つ学科の勉強には無関心だ。パリ・オペラ座学校では学科にも力を入れているようだ。」

日本からの参加者：安達悦子氏（東京シティ・バレエ団 代表）

「今回、ジュリア・ムーン氏とDCDCよりご招待頂き、IOTPDに参加した。

日本のバレエ界はとても特殊な状況である。日本では、バレエが日本古来の伝統芸能と同じようにお稽古文化として発展してきたため、日本舞踊のダンサーは生涯現役で80代のダンサーもいる。そのため、40代でキャリアチェンジという発想がない。この歴史の中で育まれたプロフェッショナルなバレエ団の形態も日本独自の形で、バレエダンサーで純粋に公演で踊るだけで生きて（食べて）いける人は、殆どいない。私自身、欧米のようなプロフェッショナルなバレエ団ができる日を待ち望んで来たが、劇場文化に対する意識や社会の構造が違うのか、叶わない夢となっている。

反面、日本には、お稽古事としてバレエを習う子供たちが非常に多く、沢山の民間のバレエ教室があり、お稽古事に熱心な親が一生懸命サポートをしている。子供達の育成や教育には大変熱心で、ローザンヌ国際バレエコンクールやYAGP(Youth America Grand Prix)のようなコンクールで入賞することには、社会的な関心度も非常に高い。子供たちだけではなく、趣味としてバレエを習う大人も増えた。このような社会の中で、プロフェッショナルなダンサーたちは公演活動と並行して、男性はバレエ教室の発表会にゲスト出演し、女性は子供たちや趣味の大人たちを教えて生計を立てている人が多いのが現状である。これはやはり、日本の伝統芸能の「弟子を取る」ということが生計の源になっているところとよく似ている。」

3.3 その他議論された点

ダンサーにどのようにして転職基金への理解を促すか

「カナダでは調査の結果、転職への積み立てをするかどうか、ダンサーが自分で決定できるようにしたい、という意見が強かったので、会員制のシステムを導入することとした。会員になり、積立を始めたら、規定年数に達するまで払い続けるというシステムだ。会員にならなければ、我々のサービスを受けることはできない。」

運営資金をどのように賄うのか

「カナダでは、この活動を政府に理解してもらうために多くの時間を費やしてきた。そして、政府は過去20年近くに渡り、大変理解を示している。また政府には、もし転職支援をしなければそれは大きな社会の損失、人材の損失になると言い続けてきた。素晴らしい資質を持った人々がおり、彼らの資質は転職の機会を与えなければ、国の損失となるばかりだ。そういったことを伝え続けてきた。」

「アメリカにはカナダのような政府からの大きな支援はない。しかし私たちが基金や企業と話す時には、カナダと同様に、『ここに素晴らしい資質を持つ人々がいる。彼らは全員が振付家や芸術監督になるような才能はないかもしれないが、機会があれば、ダンサーとして培ったスキルを他の職業で生かすことが出来る。彼らにそういった機会を与えるためにも、資金が必要なのだ』と話す。カナダと違うのは、資金源がプロのダンサーの労働組合であるために、支援の対象としているのが、プロのダンサーのみであることだろう。同時にファンドレイジングの努力も怠らない。私たちのサービスは無料で、会員制にはしていない」

「英国はダンス・カンパニーやバレエ団からの資金で運営しており、会員制ではない。会員制にすると、ダンサーは自分が払い続けてきたお金の見返りとして、引退後に必ず何かがあると期待してしまい、それは少し危険なのではないかと思う。私たちは、受けたサービスの10%の費用をダンサーに払ってもらうような制度を考えている。」

バレエ学校やダンス学校へのアプローチ

「バレエ学校やダンス学校の学生にも、転職の機会があると知ってもらう機会を作りたい。若いうちから理解を促すことが大切だからだ。理解がある場合もあるが、同時に、ダンサーの転職と聞いただけで拒否反応を示すバレエ教師もいる。」

バレエ団、ダンス・カンパニーの国際化

「ダンサーは移動する。バレエ団では実に多くの国籍のダンサーが混在して踊っている。彼らは同じカンパニーに長く留まることなく、数年で別の国に移動することも多い。そういった人々にどのようにして働きかけるかが課題だ」

どんな会社がダンサーの採用に関心を示すか

「アメリカでは著名な企業が関心を示すことが多い。誰もが知るような高級ファッションブランドなどだ。ダンサーの転職支援をしている機関があると聞き、向こうからやってきたケースも多くある。また小売業に関心のあるダンサーに向けて、企業説明会を開催したりもした。ホテルなどからの関心も高い。すでに知っている企業についても、どんな人材が欲しいのか、再度こちらでも考え直す必要がある。他の人々にはないスキルを企業が欲しがっている場合が数多くあるからだ。」

インターンシップの可能性

「英国では見習いプログラムのような、実地で経験が積めるプログラムに力を入れようと考えている。例えば希望するダンサーに、人事や経理やマーケティングなど、オフィスでの仕事を1、2週間経験してもらったり、ウェストエンドのダンサーが照明に関心があれば、ロイヤル・オペラ・ハウスに行って照明デザインの現場で経験を積むことができるようなプログラムだ。パフォーミング・アーツに限らず、企業内でもできないか考えている」

「友人のダンサーはひどい膝の怪我をして、かつ手術に失敗した。しかしバレエ団内のオフィスで仕事をし、ワードやエクセルなど、PCのスキルを身につけ、経営に関する知識も得ることができた。その結果、彼は4つのバレエ団やダンス・カンパニーから仕事をオファーされた。」

4．批判

非公式の場ではあるが、その活動内容に対して批判する声もあった。

- 自分はIOTPD加盟団体が活動する国でプロダンサーをしていたが、一度もその団体について耳にしたことがなかった。友人がそこに行って転職支援を受けたということも聞いたことがない。
- 自分はプロダンサーからダンスの指導者に転職したが、誰の支援も受けずに転職を行った。転職は自然に行うもので、あらためて行政が支援をする必要性というのは本当にあるのか。
- ダンサーのキャリアは短く、競争も激しい。だからこそ、その時期はダンサーとしての活動に集中するべきなのではないか。転職を頭に入れて、その準備をする余裕などないのでは。

5．日本への提案

以上を鑑みて、日本におけるバレエダンサーの転職支援に関してできることは何か考察を行った。日本においても、世界のどこにおいても、ダンサーのキャリアは他の職業に比べて短い点は同じであり、また怪我などでその短いキャリアが中断されることが少なくないという点も同じである。もちろん日本のバレエ界において他に優先される点は多いかもしれないが、しかし以下の点は実現可能なのではないか。

- IOTPDには様々なダンサー転職支援団体が加盟するが、その主な業務は大別すると二種類になるようだ。第一に転職に関しての情報提供など、精神的な支援を行うこと、第二に転職にあたって必要な教育や訓練の経済的な支援を行うことである。
  最初に挙げた精神的な支援に関して、例えば情報提供に限れば、日本でも行うことが可能なのではないか。実際に転職に成功した例として、金銭的な支援だけでなく、情報を提供してくれる、話をして理解してくれる組織や場があるのは非常に助かった、という声が聞かれる。
- もし新たに団体を設立するのが難しいとしても、継続的にIOTPDの会合等に参加し、各国のダンサーの転職例などの情報を入手し、それをウェブサイトやパンフレットを通じて日本のダンサーに伝えることは可能ではないだろうか。例え別の国の話だとしても、異業種に転職したダンサーの話などは、日本人のダンサーにとって刺激になるかもしれない。

- 非公式の場の談話では、ダンスとスポーツのキャリアに関して類似点が多く指摘された。引退後のキャリア支援について、スポーツ関連の団体と提携して支援を進める可能性もあるかもしれない。

参考文献・ウェブサイト

IOTPD　<http://www.iotpd.org/>

加盟機関のウェブサイト

カナダ：ダンサー転職支援センター（Dancer Transition Resource Centre）< http://www.dtrc.ca/>
フランス：国立ダンスセンター（Centre National de la Danse）< http://www.cnd.fr/>
ドイツ：ドイツダンサー転職支援センター（Stiftung TANZ – Transition Center Germany）
< http://stiftung-tanz.com/>
韓国：ダンサーキャリア発展センター（Dancers' Career Development Center Korea, DCDC Korea）
< http://www.dcdcenter.or.kr/>
オランダ：ダンサー再訓練プログラム（Omscholing Dansers Nederland-retraining program for dancers）
< http://www.omscholingdansers.nl/homepage_en.htm>
スイス：ダンサー転職支援機構（Association pour la Reconversion des Danseurs Professionnels -RDP)
< http://www.dance-transition.ch/en/>
英国：ダンサーキャリア発展センター（Dancer's Career Development）< http://www.thedcd.org.uk/>
米国：ダンサー転職センター（Career Transition For Dancers）< http://www.careertransition.org/>

一般社団法人 日本バレエ団連盟

1968年、日本のバレエ界と文化庁を結ぶパイプラインとして「連絡協議会」が組織された際、今後のバレエ界の発展のために自由に討議する場を作ろうという声が上がり、1971年にスターダンサーズ・バレエ団、チャイコフスキー記念東京バレエ団、牧阿佐美バレエ団の3団体により「東京バレエ協議会」を結成、後に東京シティ・バレエ団が加わり、以降、バレエ団の枠を超え共通する諸問題に連携して取り組んできた。

2014年9月、東京バレエ協議会4団体に新たに井上バレエ団、小林紀子バレエシアター、貞松・浜田バレエ団、法村友井バレエ団が正会員、新国立劇場バレエ団が準会員として加わり、「日本バレエ団連盟」が発足、プロフェッショナル・バレエ団を統括する全国組織として、日本バレエ界の更なる発展と、その魅力の発信に努めている。

平成27年度次代の文化を創造する新進芸術家育成事業
「新進バレエダンサー育成及びバレエ団マネジメントに係る
調査・研究、並びにバレエ環境実態調査」報告書

2016年3月発行

発行：一般社団法人 日本バレエ団連盟
〒160-0023　東京都新宿区西新宿6-12-30　芸能花伝舎2階
Tel: 03-6279-4771　Fax: 03-6279-4772
URL: http://japan-ballet.com/

編 集 協 力：昭和音楽大学バレエ研究所
印刷／製本：株式会社インフォテック

本報告書の全部または一部を、著作権法で定められている範囲を超え、無断で複製・転載・公衆送信等を行うことはできません。

非売品